もう一度あいたい君へver1.5

闘豚２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もう一度あいたい君へｖｅｒ１．５

【Ｎコード】
Ｎ０６７０Ｉ

【作者名】
闘豚２

【あらすじ】
彼女がこれを読んでくれる事を祈ります。今しあわせならそれでいい。大切なものに気づかせてくれてありがとう

第1．5話　17年まえの記憶の整理

僕は昔虫歯にならない体質だった。ある日突然虫歯ができるようになる。虫歯菌について調べてみると、もともと虫歯のできない体質の人間は外から菌が入ってこない限り絶対虫歯にならないという。

彼女とキスをしてから虫歯ができるようになったのだ　あれから17年、僕はこのいまいましい虫歯すら今はいとおしく感じられる。

彼女と出会ったのは高校1年の4月、入学したての頃だ。初めて見たときは衝撃をうけた。電気が走った。小柄な女の子が楽器を持ちながら所在無げにたたずんでいる。現実の人とは思えないかわいさだった。

その日は新入生がはじめて部活選びをする日だった。僕は中学でバスケ部にはいるが長続きしなかった、スポーツは苦手だった。だから高校では絶対文化部と決めていた。音楽なら自信があった。幼稚園から小6までいやいやながらピアノをやっていたからだ。ピアノは操作が複雑だ、楽しくない。でも管楽器なら、という打算もあった。吹奏楽部は演奏で新入生を出迎えた。希望者はこちらへと誘導され、あれよあれよという間に先輩たちの都合で僕はトロンボーンになった。スライドと呼ばれるU字型の管で音階を操作する大型トランペットと思っていただければ、ほぼイメージできると思う。

「ほかにも1年がいるから」といわれ、僕はのこのことついていき、電気が走るにいたった訳だ。

最初の1年間はろくろく口も聞けなかった。僕は天性の口下手だ、必要最小限の会話しかできなかった。それでも毎日放課後が楽しみだった。彼女は中学でも吹奏楽部だったようで、すでに即戦力。先

輩たちに混ざって演奏。こっちは来る日も来る日も練習と雑用、であるにもかかわらずだ。
１年がたち先輩も卒業し、いよいよ出番が回ってきた。その頃には彼女とも普通に話していたハズなんだが、どんなことを話したかどうもはっきり思い出せない。思い出せるのは、彼女のはにかんだ笑顔とクルクルとしか形容できない愛くるしい笑い声。そして反面急に別人のように無口になる姿だけだ。

少年の頃は恋愛感情というチャンネルが閉じているらしく、なかなか自分でも理解できない。だがその頃にはようやく僕が彼女のことを想っていると解釈できるようになっていた。画期的進歩だった。
この画期的進歩を放置していてはもったいないと思った僕は、無謀にも彼女を映画にさそった。意外にもＯＫしてくれたのだが。恋愛感情１年生の僕には、まだ彼女の真の気持ちが理解できていなかった。
映画当日僕は人生がひっくり返るような大告白をされて気が動転し、２～３日理性が働かなくなるのだが、１７年たった今にして思えばそんなものまだかわいい方で、彼女の抱える闇はもっもっと深かった。
なぜ彼女がＯＫしてくれたのか、今はわかる。そしてこの先起こる出来事の真の意味が。

映画当日、確か「ｋ－９友情のなんとか」とかいう警察犬の出てくる洋画を見たような気がする。あまりの衝撃に記憶が飛んでいるのでご了承いただきたい。映画が終わり、マックで食事をした。

ここ沼津はアーケード街があり当時としては周辺都市の住民を呼び込むのに十分な魅力があり、映画館も近くにあった。ほかにも娯楽はあるのだろうが、当時も今も娯楽と言えば映画しか知らない僕は、後はどうしたらいいのかわからずとりあえずアーケードをくぐ

りマックに入ったわけだ。彼女は食事をせず、オレンジジュースだけを頼んだ。ここだけは17年たった今でもわからない、聞くと「食べてるとこ見られるのがはずかしい」
との事だ。後々気つく事の大きさからついつい勘ぐってしまうが、多分あまり深い意味はないのだと思う。

当時、「高校教師」というドラマがあった。山崎ハコの曲がテーマ曲だか主題歌になっていて、高校生と教師の許されない愛をかいたドラマだ。ぼくはこのドラマが大っ嫌いだった。それはまさに映画当日の彼女の告白のせいだ。

彼女と先生が付き合ってるというのだ。しかも先生は妻子もち。なぜ僕に言う？意味がわからない。混乱し、動揺し、記憶が一部不明になる。その後2人でどうしたか？どうやって帰ったか？完全に記憶にない。
なぜ彼女がそんなこと言ったのか？17年たち真実に気づいた今なら解かる。
おそらく彼女は自分を取り巻くしがらみから開放されたかったに違いない。外の世界で自分を受け入れてくれる人がうれしかったのだ。先生や僕、外の世界の人間とのつながりがうれしかったに違いない。しがらみ、まさにそれは、この日このときすでに僕に迫りつつあったのだ。同じマックの店内に…

その後の奇妙な学園生活は思い出すだけでも腹が立つ。告白したくせに事を荒立てないでくれという彼女。じゃ言うなよせっかくのデート台無しにしてと心で思いつつ押し黙る僕。なにも気づかないその先生。腹が立つけどなにもできないこの悲しさ。せっかく1年もかけて告白してこの結果だ。なにか得体のしれないインスピレーションが僕を後押しした。普段人づきあい苦手な僕が彼女を口説き続けたのだ！不思議なことに彼女はさほどの拒絶を見せなかった。

いや、実はこのときマックで始まった得たいの知れない何かが、水面下でもっと大きなことを起こしていたのだが、まったく気づかずに、この時は口説き続けた。

その後、得体の知れないそれは彼女と先生を引き剥がすことに成功したらしい。先生は不自然な転勤をした。当時いろいろ噂が飛び交ったらしい。がどれも真実ではない。

最初、得体の知れないそれは僕をターゲットにしていたらしい。友達の少ない僕に対し、クラスの女子2人組みがやたら仲良くなろうとするのだ。だがコミュニケーションスキルゼロの僕はまったくかみ合わない2人が理解できず、テキトーな対応をしてお茶を濁していた。そのうち2人はこっちをまったく相手にしなくなる。当時は、やっと興味を失ってくれたか。少し残念。などと悠長な事を言っていたが、彼女ら女子2人組みは僕と彼女が付き合っていると勘違いし、引き裂くべく放たれた刺客だったのだ！

その時は気がつかなかったが記憶がある、彼女がその女子2人組みを見たときの不安と嫌悪の入り混じった表情。印象的だったのではっきり覚えている。

得体の知れないそれには別班がいたようで、彼女を尾行し、真に付き合っているのは先生であるのを突き止め、何らかの方法で転勤させたと推察する。彼らにはそれだけの力があるのだ。

ちなみに彼らは仕事は完璧にする主義らしい、ある日自転車で下校中の僕の目の前に彼女が現れた。その日はめったに使わないルートを使ったので待ち伏せは不可能。しかも彼女は自転車もなくただ立っていた。どうやってここへ来たのか。

彼女は僕に手紙をくれた。今にして思えば書かされた別れの手紙だ。だが、初めて貰う女の子からの手紙に喜んだ僕はその状況の不自然さなどどうでもよくなり、内容もどうでもよかった。別れの手紙なのに、それに対して返事を書いた。意外なことに返事を貰えた。

1年目は見ているだけ、2年目は玉砕。しかし3年目先生もいなくなり状況がかわりはじめる・

何度か手紙を書いた。電話もした。しかし快い返事はもらえなかった。しかし明確な拒絶もないまま3年生になっていた。

あれは　いつのことだったか…　その日は吹奏楽の練習は後輩たちのみで僕らは早く帰る予定だった。3年は早い時期で受験勉強に入るため引退が近いためだ。

人気のない廊下の隅で僕らは2人きりで話した。彼女は煮え切らない態度で付き合えない事をつたえる。けど明確な拒絶でないため納得がいかなかった。彼女は珍しく髪を高い位置でポニーテールにしていた。めちゃくちゃかわいい。普段は低い位置でしか束ねていない。その日はこのために特別にこの髪型にしてきたというのだ。喜ばしたいのか悲しませたいのか当時の僕のコミュニケーションスキルでは理解不能だったが、彼女の並々ならぬ決意だけは伝わってきた。

おそらくここで別れたら、もう2度と会えない

直感がそう告げていた。2度と会えない。当時の僕には死刑宣告にも等しい。死ぬなら、死ぬ前に伝えたいことがあった。それまで遠慮して言えなかった彼女の悪口。そして恥ずかしくて絶対に言えないような本音。脳の奥でしか出さないような小さな小さな心の叫びまで全部ぶちまけた。もう2度と会えないんだから、これでいいんだ。嫌われてもかまわない。まくし立てながら、終いには泣いていた。最後には母親にだって絶対言えないような恥ずかしい言葉を吐いていた

「僕は、甘えて、すがって、支えになってくれる人が欲しかったん

だ！」最後はたしかこう叫んだと思う。しかも泣きながら。誰かもし見ていたとしたら、どう思っただろうか？しかしそんなことこの時の僕には関係ない。

終わった

そう思った、泣きながら。おそらく今泣いたがためにつぶった目を開けると、そこには軽蔑のまなざしの彼女がいるに違いないと確信していた。でも悔いはない。初めてのまともな恋、やり遂げた！と不思議な充実感があった。そんな悲しいんだかそうでないんだか解からない感情のまま目を開けると、そこには、初めて見たとき以上にかわいらしい表情をした彼女がいた。

「そこまで本音を言ってくれた人ははじめて…」

顔を赤くしてたたずむ彼女を見て、一瞬で状況が変わったことに気づく。彼女は何もしゃべれないでいた。

ようやく涙をぬぐうゆとりができた僕は袖で目を拭きながら

「もう2度とこんなこと言わない」とか言ったように記憶している自分の事なんかどうだっていい、忘れてかまわない・

「顔を見られるのがはずかしい」

そう言ってうつむく彼女。その時どうして思いついたのか僕は彼女の1センチすぐ前に移動した。驚く彼女に対して

「これだけ近づけば顔下にしなくてもみえないよ」

僕が身長１６０センチ、彼女が１５０センチ。１０センチ差でそうなる。

彼女がようやく和らいだ。案外気が合いそうな気がしてきた。

世界が変わりはじめた

１７年たって思う。彼女は彼女なりに僕を気遣ってくれていたのだ。こっちにくるな、関わるなと。だけど、こっちから猛ダッシュで飛び込んでその壁を破ってしまった。おそらく、得体の知れない

それも、２人そろって付き合っているのを隠せば気づかなかったかもしれない。けど、彼女はそれを打ち明けなかった。打ち明けていてくれれば…と思うが、通常打ち明けた場合、気が狂ってると思われるかギャグを言ってると勘違いされるかになる。当時の僕も残念ながら絶対信じなかったと思う。１７年後の今だから解かるのだ。

その日は天国のような日だった。彼女はぼくを知らない世界へ連れて行ってくれた。当時の僕からすれば彼女ははるかに大人だった。人には語りたくない大切な思い出は誰しもがあると思う。初めてのキスは天国よりもはるか高いとこに僕を連れて行った。

僕も彼女も吹奏楽部としてほぼ毎日練習のため学校で顔をあわせた。“彼ら”の仲間は部の中にもいる。なぜそう思うかというと、例の女子２人組みに向けたあの不快感を表した目線を時々彼女が“彼ら”に向けていたからだ。そういう目線の時はたいてい彼女はよそよそしく、他人のようにふるまった。僕はあいかわらず気まぐれだな…でもかわいい。などと鈍感さの極致を窮めていた。

僕ら２人の行動は完全に隠密行動だった。事情を知らない僕は正直不満だった。そんなに僕と付き合ってるのを隠したいのか？とも正直思った。だが時間が経つにつれ、それも徐々に緩和されつつあった。
彼女ももう大丈夫と安心したのだと思う。だがそれは油断だった。

あの春の日。この日初めて彼女は“それ”の存在に気づき、怒りを見せた。もう来ないと思っていたものがまだ来ていたからだ。いや、もっと前に気づいたのかもしれないが、少なくとも彼女の明確な憤りを見たのはその日が初めてだった。
その日、僕らは自転車を牽きながら歩いて２人で下校していた。暖かな日差し、風になびく草、２人並んで下校する。まるでドラマ

の1シーンのようだと感じた。でもドラマではない、現実であり、現にとなりに彼女がいる。永遠に続くんじゃないかと思えるその光景、だが当時の僕はまだしっくり来ていなかった。彼女は何か隠している。そう感じた。自分はこんなに心をさらしているのに…、まいずれ話してくれるだろうと、わずかな心のしこりを抱えていた。17年後の僕からすればなんともったいないことか、彼女は心底お前を信頼してるんだぞと言いたいのだが、当時の僕には届かない。

そんな感じで美しい風景とは裏腹に心で引っかかっている僕と違い彼女は楽しそうだった。いや現に本当に楽しかったんだと思う。しがらみのない世界で自由だからだ。

そこにそれは突然現れた。
黒系の色の車が徐行してこっちに来る。中には20歳前後と思われる男が4人。こっちをみて「ヒューヒュー」と茶化す。かわいい彼女連れてからかわれるのはそんなに嫌な気分がしない、僕が照れていると車は行ってしまった。

車が行くのを確認すると、彼女はものすごい不安と憤りのまじった表情で
「今のしりあい？」
と半ばケンカごしで聞いてきた。怒りすら感じる。照れ笑いの最中だった僕はマヌケにもその表情のまま否定。

それまで楽しそうだった彼女が急に地獄に来たような感じになってしまった。気づけよ！当時の僕。だがおそらく現在の僕でなければ彼女があの4人の男からどれほどのプレッシャーを受けていたのかを説明できないだろう。

その日以来、彼女は尾行に気を配るようになった。いや当時はわからなかった。今思い返してみるとそう思う。当時ぼくは呑気な子供で、彼女がどんな世界に身を置いているのか想像外だった。そういえば大人びていた、当時の僕は単純に彼女をそう思い、尊敬すら

していた。彼女から何かを学びたいとすら思った。なんて根性のある子なんだろうとも思った。だが、それらはすべて錯覚だ。現実の彼女は根性なしだ。根性があれば、変人扱いも承知の上で僕に信じるまで告白し続けたはずだし、大人びて見えたのは、そうならざる得ない環境のせいで、現実にはまだまだ子供で、信頼する人を欲していたのだ。気づけなかった…

今、思えば彼女はシグナルをいくつも出していた。それらをつむぎ合わせると1つの真実にたどり着くのだが、当時の17歳の少年僕には不可能だった。

その頃になると2人は小さな“神社”の社の前で、毎週木曜日に会うようになっていた。特に暗くなる時間帯に。まるで周囲の目を気にしていたように…、というか事実彼女は気にしていて、僕はまったく気づかなかった。

ほの暗い神社の境内、その奥にある倉庫ぐらいの小さな社。その社の小さな階段が2人の指定席だった。まずそこに人がいるとは誰も思わない完璧な隠れ家だった。彼女は1人になりたいときよく“神社”を訪れるという。ここもそうした過程で見つけた場所らしい。

2人でじゃれ合いながら過ごしているとあっという間に時間が経つ。まるで2人の周囲だけ別時間が流れているように…。

あの日以来、ここへは別行動で合流するようになっていた。決して2人で一緒には来ない。待たされるのはたいてい僕のほうだ。

僕は待つ間いつも不安になる。もしかして来ないんじゃないか？そう思うからだ。学校で会うとき、時々どうしようもないくらい彼女は他人行儀になる。コミュニケーションスキルゼロの僕は、彼女が僕と付き合っているのを恥かしいと感じていると思った。申し訳なく感じた。こんな僕でごめんとも思った。だから、来てくれた時は本当にうれしかった。来てくれるんだから大丈夫。そのうち普通の恋人同士のようになれる、そう思っていた。

僕は完璧に彼女に振り回されていた。心のどこかでもてあそばれているように感じることもあったが、この頃はまだその思いも無視できるレベルのものだった。大丈夫、いつか彼女は秘密を打ち明けてくれる。ともかく待とう。そう思っていた。

だが事実は違う。彼女は必死に僕との大切な時間を　得体の知れないそれから守ろうとしていたのだ。もてあそぶだなんてとんでもない誤解だった。おそらく彼女は必死に尾行を撒いていたに違いない。時間をかけて。

彼女はポケベルを持っていた、当時高校生としては珍しい。

「それどうしたの？」と訊くと。
「お兄ちゃんからもらった」と彼女。
「兄弟いるんだ」と訊くと、彼女は否定する。
「通信費とかどうしてるの？」と訊くと、そのお兄ちゃんが払っていると言う。ここに重大なヒントの一部があったのだが、ちらつく男の影と先生とのことを連想し、気が気でなかった。

ポケベルは彼女にとってとても重要なものらしく　2人だけの隠れ家である神社にいても、呼び出されたら絶対行かねばならなかった。たとえ僕がいても。悲しかった。

そんな彼女が、隠すことから戦うことに転じたのは夏祭りの日からだと思う。記憶の限りにおいて。
沼津の夏祭りの日、祭りなんだから祭りに誘えばいいのに僕は映画に誘った。映画しか娯楽を知らないからだ。で見終わったらついでに祭りによろう、そう考えていた。彼女の方は祭りがメインと考えていたのか浴衣で来てくれた。女の子の浴衣姿をこんなに間近で

見るのは初めてだった。しかもこの浴衣は僕のために着てきてくれたのだ。人生でこれほどの幸せがあるだろうか？

待ち合わせは相変わらず別行動で現地集合だった。沼津駅北口の近くにある小さな神社を指定した。指定した時点では喜んでいた彼女だが、いざ当日行ってみると非常に不機嫌そうにしている彼女が神社にいた。浴衣姿で。こんな目立つかっこでこんなとこで1人待たせたんで怒ってるのかなと感じた。

「あそこの2人…」と彼女。

見ると神社内にあるブランコに大人の男女が腰掛けている。ああこんなとこで1人たたずんでいたんじゃそりゃ不機嫌にもなるなと思った。多分ごめんと謝罪したと記憶している。けど彼女はそうじゃないのよという。訴えていたのだ別のことを。察してほしかったにちがいない。たよれる男であるところを見せてほしかったのだろう。しかし彼女もそれが不可能であることを心得ていた。とにかく夏祭りだ。楽しまなければ。

映画ははっきり覚えている「紅の豚」。最初は渋っていた彼女も最終的には気に入ってくれた。

「最後のキスのシーンあるでしょ　震えがきちゃった」と言う。ヒロインを守るためボコボコになった豚が、感謝のキスをもらうシーンだ。確信を持って言う。豚と僕を重ね合わせて彼女は言っている。ただ当時のぼくは容姿が豚だからか？と思い落ち込んだ。

だが今のぼくはこう思う。ぼくに戦ってほしかったのだ、映画の豚のように…。

映画館を出ると外はすっかり暗くなっていて、人でごった返していた。祭りといっても正確には花火大会で、アーケード街は花火目当ての客でものすごいことになっていた。僕は彼女と花火を見たかったが、いい場所は人で埋め尽くされ入り込む余地がない。

「ロマンチストね」と彼女が落胆した声で言う。彼女の置かれた現

実から見れば、ぼくは花火を見たがる夢見がちな映画好き。しかたのない発言なのだが、当時のぼくはむっとした。
散々人を振り回すうえに馬鹿にするなんて、と思ったが飲み込んだ。そんなちょっと気持ちがすれ違っているとき、事件がおきた。

アーケードを出ようとしたあたりで、急に彼女が僕をほったらかしにしてどこかへ隠れた。
「知り合いがいたの」
高揚した顔で彼女が微笑む。尾行をうまくやり過ごせた勝利の笑顔なのだが、当時のぼくはそんなことわからず、僕と一緒のところを人に見られたくないのか？とイライラが増していた。

結局花火は人とビルにさいぎられ見れなかった。彼女は花火より僕との会話する時間の方を好んだ。じゃあどこか適当な場所をと思ったが、彼女は沼津から離れる事を選択。ここでは尾行に発見される確立が高いと考えたのだろう。僕はせっかく来たのに…と思いつつしぶしぶ同意。電車に乗った。
沼津から僕の住む三島まで通常、東海道線を使う。だが彼女は御殿場線を選択した。僕らの通う高校の近くの駅につながっている。僕は乗ったことがなかった。今にして思えば、彼女は彼女なりに尾行の裏をかいたつもりだったのだろう。しかしそれは甘かった。

彼らは身内のなかに異端者が発生すると特別な方法で制裁を加える。よく似た実験を昔ＴＶのバラエティー番組でやってたのを思い出す。タレントが全面ガラス張りの部屋で２４時間すごす企画で、人の集まる夏のビーチにそのガラス張りの部屋は設置されていた。中に入ったタレントは最初周囲の人に愛嬌を振りかざしていたが、２時間が経つと人の目線に耐え切れなくなりギブアップ。２４時間持たなかった。たった２時間で人間は無数の目線にさらされると精神が狂ってしまうらしい。

電車にのった。僕は一番いいアロハシャツ。彼女はかわいい浴衣。周りのみんながこっちをみる。きっと彼女がものすごくかわいいからに違いないと思った僕はその事を彼女にささやく。当然いつものようにはにかんだ声で恥ずかしがると思いきや、まったく予想外の答えが返ってきた。

消え入りそうな声で

「そんなわけないでしょ…。わからないの？」

わからないのでその通りこたえた。この時の彼女の落胆でもない、恐怖でもない、まるで罠にかかった獲物のような表情は今でも忘れない。

駅に着いた。歩いてぶらぶらする、話しながら。周囲は真っ暗で駅と言ってもろくろく街灯もない。最初緊張していた彼女もだんだん和らいでいく。あたりに誰もいないからだ。

コンビニにより、アイスや飲み物を買ったような記憶がある。それを持ち、またぶらぶら歩く、話しながら。彼女は楽しそうだ。買った物は腹に消え、手持ちぶたさになった僕は彼女にキスをした。

その時、突然車のヘッドライトが僕らを一瞬照らし、どこかへ行ってしまった。

「見られた…」

彼女のつぶやき、当時は人に見られたのが恥ずかしかったのかな？と思い

「いいじゃん、別に」と僕。

「よくないわよ！」彼女はさけんだ。おそらくこのあと、「事の重大さがわかってないわね」といいたかったに違いないが言わなかった。

彼女の中で何かがはじけた。戦う決意をしたに違いない。当時の僕は何かある、どうしたんだろう？キスしたこと怒ったのかな？僕

がこんなとこでキスしたせいで、人に見られて恥ずかしい思いをして落ち込んじゃったのかな？それにしては気迫を感じるのはなぜだ？と思った。

だが事実は違う。彼女が必死にいままで守り通してきた大切なものが破壊の危機に瀕している。ばれた以上、戦うしかないと決意したのだ。当然この場合大切なものとは僕のことだ。今ならわかる。だが１７年前の僕は彼女に愛されていることを信じ切れないでいた。

とりあえずどこかに隠れねばと思った彼女は近くに絶好の神社があることを思い出し

「こっち」と歩き出す。

ぼくは、また気まぐれか？訳わからんと思いながらついていった。完全に２人の気持ちはこの時すれ違っていたのだが、当時の僕には理解の範疇を越えていた。実に苦々しい…。そしてこの後に起こる破局の始まりを　１７年たった僕は理解できるが。当時の子供なぼくは自分の不満のことばかり考えていて予感すら感じなかった。そしてこの後、ぼくは人生最大の過ちを犯す。まさにそれは１７年の現在につながる道の始まりであり、たどり着いたゴールなのだが…。

神社は初めてきたところで長い階段があり、照明はなかった。彼女は前に来ていたらしく。自分の欲する隠れ場所として理想的だと確信した。階段中腹まできて２人座れば、暗すぎてあたりからは見えない。絶好の隠れ家だ。彼女は打って変わって上機嫌になり僕を階段に誘った。彼女は必死にぼくを守ろうとしていたのに、僕はそれを理解できず、振り回されているという被害妄想からストレスが増すだけだった。人間には表現力が必要だ、これは現在の僕がたどり着いた結論だ。

ぼくはこの日からずっと、彼女の気持ちを理解できる人間になりたい。ただそれだけを目指して１７年生きてきた。コミュニケーション・スキルを身に着け、論理的思考法を養い、断片から文脈を読

み解く方法を獲得した。みな彼女のあの時の気持ちを理解したいがためだ！　だがこれだけそろえてもだめだった。永久に到達できないはずだったその目標は意外な形で現実のものとなる。

１７年たち、まったくの偶然から僕は彼らのターゲットにされた。本来、身内の異端者にのみやっていたであろう集団プレッシャーの洗礼を受けたのだ。どうやら彼らは、団体構成員をいじめたものをこのような形で制裁を加えるようなのだ…。邪魔者は排除する。ということだ。

神社の階段で僕たちはくっついて座った。彼女はあたりを警戒している。すると、ぼくらより下の段、４～５メートル下に母親と息子らしい２人連れが座った。息子の方は僕と同じ位の年で、妙にそわそわしている。一瞬でおかしなやつが来たと思った。

せっかくの二人きり邪魔されたくないと思ったぼくは彼女に場所を変えようと言った。だが彼女はガンとして譲らない、出て行くのは向こうの方よという。彼らの存在を知らない僕はその意思の強さに感動し、その後の人生で人とぶつかった時いつもこの時のことを思い出し、彼女のように絶対に退かない強い意思を持とうと心に刻み続けた。このおかげで今ではたいていのプレッシャーは跳ね返せるようになり、彼らと１７年ぶりに遭遇したときも役立ったわけだが。そもそもが僕の誤解であり、彼女は強い意思の持ち主ではなく、ただ僕を守るために歯を食いしばってがんばっていただけだと気づいた現在は、どう彼女に謝罪すればいいのか…、いやぼくはこの後もっと大きなミスをする。このミスがかわいく思えるようなでかいやつを。

どこまで隠れても逃げ切れないと悟った彼女は立ち上がり、堂々と振舞うことを決意した。階段を下り、堂々と２人で道を歩こうというわけだ。彼女が今、世界で一番大切に思い守り通そうと決めた

男がまったくの不甲斐なさを発揮するのはこのしばらく後のことだ。

しばらくすると彼女のポケベルが鳴った。

また行くのか…。と思い落胆していると、意外な事に彼女はポケベルの電源を切った。あんなに大切というか、何よりも優先していた呼び出しを無視したのだ。それどころかポケベルの振動機能を使って僕にじゃれ始めた。いままであんなに大切にして、触らしてさえくれなかったポケベル。

そして彼女はついに告白した。言ってはいけない秘密の一部をだがそれは恐ろしく遠まわしな表現で当時の僕の分析力では限界があった。

前に付き合っていた、お兄ちゃんの話。お兄ちゃんといっても兄妹でも幼馴染みでもない。関係の部分はごまかして彼女は話を進める。言わなくてもわかってほしい。それが彼女の願いだ。あの映画の豚のように戦ってほしいと願ったに違いない。

けど僕は散々振り回されストレスもかなりたまったとこに前の彼氏の話かよと落胆し、聞き流してしまった！　もし細かく聞いていたら、違っていたかもしれない。今の僕のスキルの何分の一でもいいから発揮できていたら、状況は変わっていたかもしてない。何より、気持ちがすれ違ったまま別れなかったかもしれない。

しかし当時の僕は自分に自信がなく、その前の彼氏と彼女のよりが戻ることばかり心配し、その辺を話しの論点にしてしまった。今の僕なら、相手が強調したい論点かどこなのか探りながら話をする事ができる。今できても、当時できなければ仕方がないのだが…。

彼女が指摘したいそれは“彼ら”のことだ。構成員同士を守りあい、子孫繁栄も仲間内のみで相手を決める。外の人間と付き合うのは異端であり、制裁の対象になる…。

と、このように言えばいいのだが、彼女も子供だった。１７歳にしては大人だと思うが、やはり子供だ。今の僕から見れば。秘密を守るよう教えられて育った彼女はせいいっぱいがんばって説明した。この僕に賭けたのだ。彼女の並々ならぬ期待は伝わってくるが、いかんせん話の筋が見えず当惑するばかりの僕。せっかくのデートだ彼女がこんなに一生懸命話しているんだから、意味がわからずとも笑顔で返さねばと思い、笑顔でうなずき続けた。

これこそが僕の人生最大の過ちだった。

そのせいで彼女は話が通じたと感じ、満面の笑みをみせる。僕も笑い返す。２人の気持ちが完全にかみ合ってないのに、もしわからないという顔をしていれば、彼女は僕が理解するまで説明しただろう。コミュニケーション能力の欠如。許しがたい、犯罪的なまでの欠陥。人生最大の汚点であり、ぬぐえない過去。

２人は完全な誤解状態のままその日を終え、帰宅した。彼女は充実感で一杯の顔だった。その笑顔の意味さえ当時のぼくにはわからなかった。彼女はぼくのような何の役にも立たない人らしい物体にはもったいないくらいの、本当にすばらしい、たとえようのない、最高の人なのに、ぼくはその輝きがまぶしすきて、その本当価値、すばらしさにきづけないアホまるだしだった。

この後の出来事は、できれば書きたくない。思い出すのも表現するのも死にたくなる。

僕がまったくわかってないと彼女が悟ったのがいつだったのかわからないが、しかし、あの最高の笑顔が時間とともになくなっていたのは確かだ。彼女はまた、ポケベルに従うようになる。彼女の落胆はどれほどのものか想像するだけで死にたくなる。季節は秋にな

っていた。彼女がもう会いたくないと言ったのはこの頃だと思う。

もう会いたくないという前、彼女は最後の賭けにでた。

彼女が前付き合っていた先輩。先生の後に付き合った人、だが。ある日突然、彼女は先輩の正体をあかす。それがどれほど“彼ら”にとってタブーなのか当時の僕は知らなかった。相当勇気を振り絞って言ったに違いない。なのにぼくは彼女の命がけの告白にピンとこづ。あろう事かその先輩にそうなんですかと訊いてしまった。それがどれほど彼女の立場を危うくするか気づきもせず。

この事実に気づいたのは17年たったごく最近だ。つい数週間まえまで、ぼくは彼女を気まぐれなひとだった、どーしたら彼女を理解できるだろう。もっといろいろ学ばなくちゃなどと思っていた。

数週間まえの自分に殺意さえ覚える。殺してやりたい。彼女がどれだけ必死だったのか理解した日の夜、ぼくは声を出して泣いた。たった一人のこの部屋で。

彼女とはここで終わるはずだった。しかし鈍感の極みをさらに磨き続けたぼくは、彼女に攻勢をかけつづけた。真実を知った今の僕には絶対そんなことできない。きっと彼女はこの頃にはぼくの天然記念物的アホさにあきれていたことだろう。

今考えればヒントはいくつもあった。初めて映画に誘った日、彼女はこういった。

「私の本当の姿を知ったら、きっと嫌いになっちゃうよ」と。

部活中、雑談の中で、唐突に電車で痴漢にあった話をする。

「大丈夫なの？」と訊くと。

「大丈夫」と嫌悪感なく、いじらしいといった感じの、気づいてよといった感じの微妙な笑顔でぼくを見る。きっとこのヒントに反応できるか見ていたんだと思う。みごとわからなかったんだが。

この時期、ぼくはクラスで完全に孤立していて親しい友達はゼロだった。思い返してみれば高校3年間ずっとそうで、思い出せるクラスメートの名前は一人もない。最初の1年は僕自身の責任だったから気がつかなかった。が、2年目以降は“彼ら”が介在していたと考えるとどうだろう。

対象の孤立化を図るのは彼らの常套手段だ。

小・中学校ではともにそれなりにいた友達がゼロなのは異常だ。だが僕は高校ともなるとちがうな、もつと成長しなくちゃと思って、気がつかなかった。普段無視するクラスメイトが時々はずす仮面の下の顔に気がつかなかった。時々、短時間だけ普通の人として扱ってくれるのに、教室内の人が増えると、また元にもどるということがしばしばあったのを覚えている。

この頃ぼくはどういう訳か朝食を食べられないほど、胃が痛かった。例の集団で視線を浴びせかける攻撃を学校で受けていたのが体に出たんだと思う。意識は気がつかずとも体が反応していたのだろう。日曜日には普通に朝食が食べれるので母親が訝しがっていたのを覚えている。

彼女との密会が再開してから、こんな会話をしたのを覚えている。

「僕、学校の同級生の顔ぜんぜん覚えられないんだよ」

事実、今でも人の顔はすぐ忘れる。だから今ではそのひとの癖で覚えるようにしている。

「それでか…」彼女は納得した。

もし僕がまともな神経の持ち主だったらこの頃精神がおかしくなっていたに違いない。天性の鈍感さゆえにこの程度ですんだのだ。

心配していた彼女は僕を再び受け入れてくれた。彼女を落胆させたあの鈍感さが、あろうことか僕を守っていたのだ。

なぜ、再び彼女は会ってくれるようになったのか？“彼ら”の尾

行も承知の上で、彼女は責任を感じていたのだ。自分と関わったせいで僕がこうなったと。

第2ラウンドの始まりはこうだ。

この時期友達がいない事は話した。だがなぜか僕に近づき時どき話しかけてくる他クラスの男子がいた。親しげだが妙によそよそしい。今思い返すとこの親しげだが妙によそよそしい男子は2年から3年生の間何人もいた。ま、気は会いそうないけど邪険に扱うのもどうか、コミュニケーション・スキルを身につけるためには人と会話をしなくてはと思いそれなりに近寄ってくるたび話に応じた。

「友達なの？」

彼らと話していた僕に久しぶりに彼女の方から話しかけてきた。ものすごい心配そうな顔で。いたわりや愛情も感じた。それまで他人のようにされていた僕はうれしかったが、さもこれが当然といわんがごとく、以前の調子で彼女の言葉に応じた。

「違う、知り合い」

彼女の顔に恐怖が浮かぶ。

記憶があいまいなのではっきりしないがこのしばらく後、部活中彼女が突然両膝をついてしゃがみこみ、泣きながら・

「ごめんね、わたしのせいでごめんね」

と言ったことを覚えている。この時期の記憶は混乱していて、どう対処したのか思いだせない。彼らのプレッシャー攻撃のせいで大切な記憶が混乱しているとは死んでも思いたくない。

再び彼女からまた以前のように会おうといってくれた。

天にも昇る心地だった。やったようやく想いが通じた！あきらめないでよかったと心底思った。その裏で繰り広げられていることや、

彼女の気持ちの変化には何ひとつ気がつかずに…
だが、今回はそんな僕の欠点すら受け入れてくれたように思う。この欠点のおかげで助かっているようなものだ。彼女は安心した。本気で僕を気遣ってくれていた。彼女は知らなかっただろう、この17年後にぼくがそのことに気づくとは。

密会の場所は相変わらず神社だった。以前と同じように。しかし季節は秋。春の時よりも日は長く、周囲は暗くなかった。遠くからでも監視できる。それでも彼女はこの場所を指定した。

再び、あの2人だけの時間が帰ってきた。僕と彼女の周りだけまるで別空間のようになる永遠の空間。人生最高の時。

覚悟していたものがついに来た。おそらく最初に気づいたのは僕だ。じいさんが1人とぼとぼとこっちに来る。神社の敷地を不自然に横切り、消えた。こちらを見ながら。彼女は気づいてない。事の重大さに気づいていない僕は、気づいていなかった彼女にそのことを言ったと思う、記憶が混乱している。彼女は覚悟していたのもが来たことを悟ったに違いない。
「どうしてその時いってくれなかったの？」
彼女は不安な声でそう言った。

密会は以前と同じ毎週木曜だった。次の週神社に行くと、ぼくらの指定席に幼児を連れた母親が2人いた。そのうちどこかへ行くだろうと思いきやいつまでも居座る。彼女は一旦ここを立ち去ることを提案。実際立ち去ってしばらくしてもどると。誰もいなくなっていた。ここまできても僕は気づかない。不自然さすら感じてない。彼女のこの人はこれでいいのよという目線が痛かったように思う。17年たった今、彼女のあの目線の意味がようやくわかるようになった。

彼女は言った
「曜日を変えましょう」
唐突な提案に驚いたが特に拒否する理由はなかった。
１７年たった今、彼女のいじらしさがいとおしく、どうしようもない感動と動揺を僕に促す。彼女はこの時点でもうやめにしてもよかったのだ。相手は絶対勝てない相手だ。無理に抵抗しても無駄だ。
自分のせいで僕がこうなったと思うならもう充分つくしてくれている。これ以上自分の立場を危うくするほどの価値のない男であることは知っているはずだ。それでも彼女は抵抗する道を選んだ。この僕のために…。

曜日は確か金曜日に変更したように記憶している。実際その日行ってみると、まったく人気がなかった。完全な無人。今思うと、て事は木曜日には無意識のレベルで僕も人の気配を感じていたんだろうか？そう感じさせるほどの完全な無人状態だった。
彼女は歓喜した、久しぶりに見るあの満面の笑み。なんだかわかっていない僕もその笑顔が見れてうれしかった。あの瞬間を永遠のものにしたいと今は思う。あれが“彼ら”を出し抜いた最後になった。

このあともしばらく、毎週金曜日僕らは会った。
もっとも印象的に覚えているのは、２人で抱き合ったとき、ぼくが彼女の腰に手をかけたとき、
「だめ、むこうから見られちゃう」
といって、２人の位置を入れ替えることを要求した時だ。入れ替われば、監視者からは僕の背中しか見えないという訳だ。彼女はもう覚悟していた。

この頃季節は冬だった。ようやく日が暮れるのが早くなり、彼女を安心させた。これだけやたらと暗がりを好むんだからそろそろ気づけよと思うのだが、当時の僕には不可能だった。

人の記憶とは不確かなもので、時間が経過するほど現在に近づくんだからより鮮明に覚えていてもいいはずなのに、この頃の記憶は特にぼけている。

ぼくはこの頃彼女との関係をどう持っていけばいいのかわからなくなっていた。ぼくの望みは普通の恋人同士のようになることだ。こんな暗がりでコソコソすることではなかった。どうすればそうなれるのか…。クラスや学校で続く孤立化作戦もあいまってぼくの思考は判断を誤り続ける。あろうことか彼女にイライラを再び感じ始めていたのだ。ある意味“彼ら”の勝利だ、くやしいが。ぼくは子供すぎて、彼女の保護なしではこの2人の関係か維持できないことに気がついていなかった。

そしてわずかながらイライラを彼女にぶつけるようになっていたのだ。それでも彼女はぼくをいつくしんでくれた。ありえないことだと思う。ぼくのどこにそんな魅力があるというのか今でもサッパリわからない。“彼ら”さえいなければ僕らは最高のパートナーになれたかもしれない。

知らないところで彼女は何らかの非難をされたらしい。今度は場所の変更を提案してきた。違う神社で会おうというのだ。もし現在の僕なら、そのワンパターンな手はもう通じないから、違う提案をしただろう。人海戦術はかれらのオハコだ。おそらく周辺のすべての神社に見張りをつけていたに違いない。まさに罠にかかりに行くようなものだ。そして僕らは見事にはまった。

その日僕は彼女と会話を中心にして挑もうと思っていた。僕は彼

女のことをなにもしらない。お父さんのこともお母さんのことも、妹がいるらしいことは何度かの電話で知っていたが、ほかに兄弟がいるのかとか。

どんな風に育ったのか。何に今一番興味があるのか、将来どうしたいとか。どんな食べ物が好きで、今までの旅行でどこが一番楽しかったのかとか、僕は彼女がどこに住んでいるのかさえ知らなかった。何も知らなかった。いつも僕が一方的にしゃべるだけだった。

言えるはずがない。彼女の人生はすべて“彼ら”と関わっている。説明できるはずがない。何度きいてもはぐらかされるからイライラしていた。

けど今日こそは聞き出してやると決意していたのだ。僕なりのわずかな成長だが、事態の切迫さと、局面が重大なとこまで来ていて、まさに追い詰められているとこだとは夢にも思っていなかった。

それは2人ですごした、いやすごしたと思い込んでいる最後の密会となった。今は考えるだけでおぞましい。すべて見られていたのだ。最後の思い出は汚されてしまった。

次の週、もう会うことはなかった。電話でもう会わない旨伝えてきたのだ。僕たちは捕食者についに捕まり、餌食とされてしまった。

このあと、廊下ですれ違いそうになっても彼女の方から逃げる。僕の周辺には“彼ら”が常にいた。僕が毎日話している連中は“彼ら”だったのだ。その連中と何も気づいていない僕が歩いている様子を彼女はどんな風に見ていたのだろうか？僕と再び会うと僕にこれ以上の何かがおこるといわれていたのだろうか？事実今考えるとピンとくるものがある。大学受験の際、推薦受験資格がとれたのは担任の先生がたった1人でがんばってくれたからだときかされた。先生も事態の奇妙さから違和感を感じていた。成績が振るわなかっ

たのは僕自身の責任だが、それにしても評価が低すぎた。近所で僕と同じ名前の犬を飼うおばさんがいて、わざとらしく我が家の前でブラッシングをしているのを家族から聞いた。わが一家は僕同様天性の鈍感人間がそろっているので変な人だねくらいにしか話題にならなかった。

部活ももうない。3年生は受験に専念する。クラスも離され、会う機会はほとんどない。以前は廊下で、はるか遠くに彼女をみつけるて、じっとにらんだりすると。こっちを振り向いたりした。目が合い、楽しかったなんて事もあった。それももうない。視線をむけても彼女は逃げる。けど完全に視界から消えるわけでなく、背を向けて僕の見える範囲で立ち止まり、じっとしている。けっして振り向かない。彼女なりの抵抗だったのかもしてない。あれが抵抗の限界だったと思うとなんといじらしいことか！あの状況でさえ僕にシグナルを送っていたのだ！

にもかかわらず、まったくもって気がつかなかった。とても僕と同一人物が過去行った所業とは想いたくないが、否定すると自分がおかしくなってしまうので受け入れるしかない。、

ある日彼女は髪を切った。ショートカットにしたのだ。正直似合ってない。その日以降本当に彼女は僕の周辺から感じられなくなった。

それでも本当にまれに顔を見る。チラとこちらを一瞬みると感じるのはぼくの勘違いかもしれないが、侮蔑の感情もあきれた感情も彼女からは感じなかった。だから僕はまだ脈はあると思って手紙を出し続けた。

今は思う　おそらく彼女は僕が何事もなく無事でいるのを一瞬みて確認して安心していたんだと思う。彼女はこの時点でさえぼくを気使ってくれていた。

殺人的なほど鈍感な僕はまったくわからず手紙を出し続ける。け

どその鈍感さがぼくの無事を保障している。手紙を見るたび、彼女が安心したのではと今は信じたい。

古い神社、今もあるだろうか…

そう思いごく最近地図をたよりに行ってみた。それはまだあった、周辺の様子もずいぶんかわり、とても隠れ家と呼ぶにはほど遠いものになっていたが、2人で座った社の階段は当時のままだった。社の内部も記憶にある通りだった。

僕には3つの宝物がある

1つ目が先に述べた2人の思い出の社がある“日吉神社”

2つ目が夏祭りの後、僕の態度に心が影響された旨を綴った彼女の手紙。

3つ目が僕のへやで撮った2人だけの秘密の録画。

写真はなくしてしまった。あと「紅の豚」の半券もまだ持ってる。

これら品物が思い出を事実として僕に伝えかける。

彼女の望むべき世界が実現することを祈るのが僕の立場だ、今も昔も。もう1度あってこれらのことを伝えたい。彼女はきっと「ありがとう」と言うだろう。その言葉が聴けたら、ぼくはもう満足だ。

その奇跡を信じて…。

奇跡を信じて、ぼくは作品を作ろうと思う。ぼくは東京に出てから漫画を描いていた。1つだけどうしても足りないものがあった。それは“心”だ。彼女からは心をもらった。大切な大切な人を想う心。会えないなら、僕にできることはただ1つ。このもらった心を作品にぶつけるだけだ。奇跡を信じて。

第2．7話＋β　現在と将来の僕（前書き）

前回の話の補足です、もしちがっていたら
ぜひ連絡ください。

第2．7話＋β　現在と将来の僕

僕は“彼ら”を糾弾する気はさらさらない。もともと1人が好きだし。正直これ以上関わりあいたくないというのが本音だ。僕自身の将来の保障と、もう一度彼女を会うこと以外さしたる望みもない。

非難するつもりはないが、１つだけ、どうしても引っかかるものがある。“彼ら”の中の一部、おそらく１０代後半～３０代前半の男子による年下の女の子に対する扱いだ。子孫繁栄を身内でと考える以上そのようなバイアスが働くのはしかたがないが。ずっとひっかかっていた。

彼女は決してそうした行為がものすごく好きというわけではなかった。

同級生の“彼ら”も彼女を口説いていたがうまくいってなかったようだ。その時の彼らの態度を見ていればわかる。明らかに僕にたいして苦々しい敵意をもっていた。

しかし、“彼ら”と思われる上級生のリアクションはなにかちがう。お邪魔虫め！くらいな目で苦々しさは感じない。

彼女は唐突に、「きょうはいいよ」と言う。そして、僕が彼女に無理強いしない事を明らかに喜んでいた。

今思うと何かあるとしか思えない。

“彼ら”のうちお兄ちゃんは年下の女の子に対して何らかの優先権を持っているのではないのか？それなら、彼女の積極性がある程度理解できる。自分で相手を選ぶ自由を手にしたかったんじゃないだろうか？そう考えると辻褄があうのだ。

初めてのデートの日、彼女は体のラインの強調されたジーパンをはいていた。けど、鈍感の極みの僕はそれをとくにじろじろ見ない。

「他の人とちがってじろじろみないのね」と微笑んでくれた。
「ふつうはみるのかな」と訊くと。
くしゃっと笑顔を作って
「そうよ」
と微笑んでくれた。

お兄ちゃんの話をする時の彼女の感情はものすごく微妙な感覚で単純にはあらわせない。わたしは認めるけどおかしいでしょとは言わないが感情としては、そんな感情であったように感じる。彼女はその制度を受け入れている。疑問をもちながら。おそらくその制度以外の部分は“彼ら”の世界を受け入れて自分のものにしているのだ。それならわかる。なんだかいろいろなことが。

そいつらからしてみれば僕は彼らの所有物を横から掠め取る害虫というわけだ。害虫は駆除する必要がある。彼女が恐怖した理由もなんだかわかる。

ある日のこと、吹奏楽部の練習でその日実験的に机を組んで仮設ひな壇をつくり、コンクールのステージ風にして練習したときがあった。オーケストラなどで、奥に行くほど壇が高くなっているやつを机でマネたのだ。

僕と彼女はトロンボーンだ、位置はかなり後方、乗ると結構高いし不安定、一瞬バランスをくずす。たいしたことはないのだがたいそう心配する彼女。ほかの人がいる手前、あまり親しげにしてはいけなかったはずなのに、
「昨日、あなたが高いとこから落ちる夢をみたの」
オカルトなんて信じないぼくは正夢を信じる彼女をからかった。しかし、ものすごく彼女は萎縮している。きっと僕がここで落ちることを心配しているのではなく、誰かに何かされることを連想して萎縮していたんだと思う。普通でないくらい心配してくれた。当時

の僕は意味がわからずとにかく照れた。

最近“彼ら”のターゲットにされていらい、１０年来の友人を失った。孤立化は彼らのオハコだ。もしかして、彼も“彼ら”だったのだろうか？思い当たるふしがなくはない。すると「２０世紀少年」同様“絶好”を言い渡された人物はなにが何でもそうせざるえないのだろうか？そいつも不自然に若い彼女を持っていた。短期間でわかれたとか言っていたが、どういう経緯で出会って、どういう子なのかついぞ説明されなかった。僕の考えすぎであることを祈りたい。

もしこの考えが正しいとしたら、今の彼女は僕をのぞんでないかもしれない。もうその制度に悩ませれてないとしたら、僕を求める理由がないからだ。

満足しているのだろうか？それが彼女の幸せというなら無理強いはしたくない。けど１度あって、この１７年にけりをつけたい。

今回の件で止まっていた僕の時間は動き出した。しかしそれは１年間分で１６年は止まったままだ、ショートカットにしたあの日以降の彼女の気持ちをしりたい。彼女は巻き返しを図ったように思う。その後彼女は何度か僕と会おうと努力していた。

卒業式の日、僕は“彼ら”の誘導により彼女とひきさかれた。ぼくは卒業式後、３年間をともにした部活の仲間と最後の別れをしていたつもりだが、実際はちがったようだ。仕組まれたシナリオだった。彼ら全員が“彼ら”とは思いたくないが、卒業後、用のなくなった僕に連絡をくれる友達は一人もいなかった。卒業式の後、僕を彼女から隔離に成功した彼らは消えていった。

実はこの後彼女に会っている。初めてショートカットの彼女をまじかで見たのはこの時が初めてだった。正直似合ってない。“彼ら”の計画に気づいた彼女は猛反撃に転じ、最後1人とぼとぼしている僕の前にあらわれた。いったいどうやって僕の居場所を突き止めたのだろう。

「今年の失業式はなんだか去年と違う感じになっちゃったでしょ？」

彼らによって僕が誘導された事を彼女はにおわす。全然気づかない僕。もうこの時彼女とどう接したらいいのかわからなくなっていた僕は混乱した。以前のように心をうまく開けない。

今のぼくなら、このままこの場で彼女をかっさらう。アガサクリスティーよりも完璧なトリックを使って尾行をまき、どこか離島にでも逃げ込む。田舎なら2人でどうにでもなると思うし、“彼ら”得意の人海戦術もここでは用をなさない。仮にそれでも攻めてきたら、また別の島へにげればいい。海外でもかまわない。海外にも“彼ら”の仲間はいるときくがそんなこと知ったことではない。彼女と2人でいればそんなもの水滴を拭くがごとくけちらしてやる。2人でいれば…だが。僕は今1人だ、1人は無力だ。

最初、尾行をうまくまいた彼女は満面の笑みをうかべていたが、それは短時間でおわった。僕がようやく以前のように心を開きかけたその時先ほど別れた僕が当時友達だと思っていた人もどきが戻ってきた。実はこの後の記憶がどうもはっきり思い出せない。充実した会話はできていなかったせいだ。僕は完全に心を閉ざしていた。

最終的にはあと数回顔をあわせる。会うとは書かない。部活のOBとして何回か顔をあわせる。

飲み会の席で、周囲に監視の目があるにもかかわらずやさしいま

なざしを向けてくれる彼女。けど、このころの僕はどうかしていて、もう彼女はぼくのことなんかどうだっていいんだと思っているに違いないと思いこんでいた。
その時でもいいから、彼女をかっさらってしまえば後はどうにでもなるのに、やる気ゼロだった。

あれは、いつの事だったか、1年の浪人生活を終え、再び吹奏楽OBで飲み会をやる機会が巡ってきた。今、思えば僕が友達と思っていたそいつは僕の出席を歓迎はしてなく、警戒していた。
すでに計画は出来上がっていた、用意周到に男子班、女子班に分かれれ、自然な形で2次会を別々の場所で開き、僕らを引き裂く。

彼女の“意表をつかれた！”という表情と“なんでいっちゃうの？”という表情。あの日あの時のあの表情の意味が今理解できようとは夢にもおもわなかった。
分かれる、いや、引き裂かれる前、飲み会のせきで彼女は途中から大胆にも僕の隣に移動し、陣取った。今思えばこのまま最後まで僕のそばを2人きりになるまで離れないつもりだったのかもしれない。
今ようやくあの時の周囲の異様な空気の意味を理解できる。彼女はまだ戦っていたのだ。
どういう事だろう？だったら手紙の1つもくれていたら。当時の僕でさえちがう反応ができたはずだ。
理解できない不自然な現象の時は、なにか必ず欠けた情報が存在する。

記憶が前後しているかもしれないが、印象的な記憶が残っている。
もう彼女の気持ちが理解できなくなった僕は、完全無視をした。空気のように。飲み会で最後店をでて店前でたむろす時。とにかく

僕は彼女の目の前を空気のように横切った。この時の僕の気持ちは、“これだろ？これがお望みなんだろ？”

瞬間彼女がおお泣きした。近くにいた女子が動揺し彼女をいさめる。僕は動揺したが声をかけられなかった。心を閉ざしていたのは軽率だったと思う。動き出した時間はこの時点で再びまた停止した。

記憶が混乱している。

彼女は横浜の音楽の専門学校に行くとい聞いた、ブライダルなんとかとかいう、結婚式でピアノを弾く仕事につきたいと言っていた。時系列がはっきり思い出せないが、記憶している以上どっかで聞いたはずだ。いま思うとこの学校自体“彼ら”のものと考えるのは考えすぎだろうか？

大学合格後、一度新横浜に行くから待っててと手紙に書き、返事も待たずに実行したことがある。卒業後の彼女の行動が気になりはじめていた頃だ。確かめたかった。彼女と僕のことを

駅に着く、まつ、来ない。いや、じつは気づいていた。ずいぶん遠くのベンチに男女2人組みが座っているのを。女の方は小柄で、彼女が座るとあんな感じになる。以前のぼくらを遠くから見ている錯覚に陥る。

あれは彼女だったのだろうか？

じつは“彼ら”の心理戦のなかに、人の認知力を惑わす手法がある。周囲の赤の他人と思っている人が全員白いヘッドフォンをして

いたり、似た風体の別人を似た服装で何度も見るとか、一度気になりだすとものすごいストレスになる。
人は空白の情報を常に埋めたがる性質がある。一見意味のないそれらも毎日続くと、意味があるように感じ、妄想が膨らんでいくのだ。
根拠に乏しい断片をいくらつむぎ合わせても答えがでず精神を蝕んでいく。この場合、このバイアスをかけようとする人間の意図を読みとれば意外と答えがでる。

あの光景はまさにそうした心理戦の一部だったのかも知れない。だとしたら“彼ら”の心理戦を突破して、彼女にたどり着く方法はあるのだろうか？

同じようなことは高校時代にもあった。後ろから見るとまるで僕と瓜二つの男子がいた、やはり同様に笑顔だがよそよそしい読めない仮面でいやらしい笑顔をする。
授業中へをなんどもし、非常にくさい。やつとは一度受験会場でも会ってる。僕の席の2つ後ろで話しかけてきた。ものすごい偶然のはずなのに驚きを見せない、さも当然という態度。その態度は最近よくみる男たちに共通して見られるものと同じだ。マニュアルでもあるのだろうか。

浪人時代、おそらく僕は完璧に彼らに監視されていた。時々同級生に会い、声をかけてくる。もちもんそいつらからどこかへ誘われた事も一度もなければ、電話がかかってきたこともない連中だ。中にはバイクに乗っていたやつもいた。みな妙に親しげでよそよそしい。
たまに、部活の仲間にあうと、妙ににやにやして、僕が近況を話してもまるで全てを知っているような態度だ。この時、ぼくはこいつのことを友達だと思っていた。いや、3年前からそう思っていた。

この事実に気がついたのもほんの数日まえだ。いま考えれば、僕らの行動をずっとこいつがさぐっていたのだ。

「お前本当にわからないの？」

浪人中ぼくは半年間ファミレスでバイトをした。その日遅刻しそうで自転車をとばしているとバイクとぶつかった。幸い怪我はない。そのとき、バイクのうしろから1台の自転車にのったやつが現れた。

その後会う機会があった時、こういわれた。ずっと監視していたのだろう。しかし彼女に対し心を閉ざし衝心の僕は友達との会話がうれしかった。こんな下劣なやつとの会話なのに。

もう一つ気になる記憶がある。大学入学が決まり、引越し作業中。父方の実家で爺さんが亡くなった。お通夜にとあわただしく一家で遠出の準備をしていると、向かいのおじさんが様子をうかがう。普段そんなことしないくせに。普通訊くなら何かあったんですかと聞きそうなものをどこに行くのかせわしく聞いてくる。

僕がこの状態であったなら、彼女はどうであったのだろう？おそらくもっと厳重な監視下だったに違いない。たった一人で。ぼくと関わったばかりに…。考えすぎだろうか？もう一度会えるとき訊こうと思う。あればだが…

この後に及んでも僕は彼女のことが好きだ。初めてあった、あの高校の廊下での出会いのときから、一寸の狂いもなく同じ想いをしている。伝えたいことが山のようにある。あの日あの時の不甲斐なさをわびたいし、わかってあげられなかった事も直接わびたい。今日今日僕がここにいるのは君がいたからであり。そうでなければとっくに自殺していた。真実に気づいた今、君に断りなくもうこの命粗末にできない。君があれほど一所懸命守ろうとしたものを僕の一

存で勝手に処分することはできない。
人間はギリギリまで追い詰められたとき、最後にしがみつくのは思い出だ。ぼくの人生はがらんどうのアルミ缶のようなもので、うすっぺらい映画や本の知識しかない。その中で風に飛ばされそうなアルミ缶を一つの重い石ががっしりと中に入り込み、風に飛ばされるのを防いでいる。その石のおかげで、突風が吹こうが、大雨が来ようが、吹き飛ばされない。
君との思い出が僕にとっての唯一の思い出であり、最後につなぎとめてくれる希望なのだ。うすっぺらいがらんどうの空間は、あの日あのときの2人きりの世界、別時間とも思える永遠の時間で今もぼくの支えとなったいる。

このあたりにきて、ようやくなんで君が僕ごときを好きでいてくてたかわかってきた。
誰が何を考えてるのかわからないような世界で生まれ育った君からみれば。ま逆の位置にいる僕。

あれはまだ1度目の破局が起こる前、夏祭りの前だったと思う。この日彼女もよもや近々発見されるとは夢にも思ってないころで、神社ではないところとで会おうといってくれた。彼女も僕同様一人が好きらしく、彼女は神社以外にも秘密の場所をいくつか持っていた。

午後昼をすぎたくらいの時間、後ろは何らかの造成予定地で長い草に満ち、前は真新しい舗装道路。その境にある白いブロックの境界に2人で座った。
今思うと彼女は特段暗がりが好きなのではなく。このような場所も好むのだなとおもう。白いブロックの境界上に2人ならんで腰掛け、じゃれあっていると、彼女の持っているカバンが気になった。

「なにはいってんの？」
と聞くと。答えを渋る。今思うと、それはそれは見られてはまずいものがきっと入っているに違いないと思うが、当時の僕は思わない。
話の流れ上拒否できなくなった彼女はカバンを開け、慎重に慎重に中を吟味してから取り出した。８割ほど。今思うとポケベルを見られたくなかったのかもしれない。間違いなく目立つから。
ノートや手帳といった類のものが出てきて、何でそんなもの必要なんだと訝しく思ったが聞かなかった。なんと言ってもまさか自分が本気で好かれてるなどとは思ってなかったわけだから。おいそれときらわれそうなことは訊けなかった。

手帳のなかに写真が2枚はいっていた。中学時代の彼女の写真とごく最近のもの。両方とも1人で写っているもので、誰に撮影してもらったかについて訊くとはぐらかす。
「1枚ちょうだい」
というと。猛烈な拒絶をみせる。キスしたってそんな抵抗みせないくせに…。おそらくそれはポケベルなみに大切なものなのだろう。

だが、この後彼女はこの写真のうち、1枚をくれる。

それはあの彼女の大告白ののち、僕がじつは何もわかってないと気づく前の出来事だ。その写真をくれるという行為は、彼女にとってあのポケベルの呼び出しを無視するのと等しい行為だったのかもしれない…

ぼくは卑しい人間だ。彼女がそれほどの思いでくれたプレゼントをなくしてしまった。そういえばずいぶん立派なデザイン額に入れてプレゼントしてくれていた。そこに込められた彼女の想い、そしてそれをなんのためらいもなく踏みにじった僕。
大学生の時の最後の電話で彼女は言った。

「まだもってたの？」

僕としては当然なのだが、彼女のあまりにあっさりした反応に落胆し、扱いが雑になり、最終的にはなくしてしまう。

けどそれは、彼女にとって踏みにじられた想いのモニュメントであり、踏みにじった張の本人のぼくが、その自覚もなく大切にしていたことへのなんともいえない感情の表れだったんだと思う。きっと電話口の向こうではこの人はこれでいいのよという目をしていたと信じたい。

それとも、僕のこの今の現状はやはり天罰なのだろうか？

神社で最後に“彼ら”を出し抜いた日

彼女は満面の笑みで僕と座った。かとおもったら、ぼくをのこしてどこかへ立ち去ってしまった。

気がつくと神社の社を歩いて一周してきたのだ

「ふふふ、だれもいないでしょ？」

最大限のヒントを出しているのだがぼくはただただこのかわいい笑顔がすきで好きでたまらないだけだった。

怒って当然のはずだが、そのまま怒りひとつみせず僕の愚鈍さを受け入れてくれた。

その後しばらく彼女はまだこの時の思いを失っていなかったはずだ。卒業後の何度かの彼女の巻き返しはドラマのようであり、感動的なはずなのに、ぼくの記憶はそれを忘れよう忘れようと17年間勤めてきた。あれほど必死だった彼女の行動。いま、薄らぐ記憶の中からどうにか掘りだす必要がある。

なぜそれほど大切な記憶を消す努力をしてきたかというと…。

たかがバレンタインチョコレートを貰えなかったという程度の理由なのだ。3月の時点で燃え尽きていた。心を閉ざしてしまった。彼女はいつの時点までこの思いを維持できたのだろう？会ってもう一度確かめたい。

大学に入り、喜んだ僕は早速彼女に手紙を書いた。この頃になると僕の精神状態もだいぶ改善され、夜中かなしばりにあったり、不眠で悩むこともなくなった。、八王子で開放感にひたっていた。

知らせる相手をして彼女の顔が浮かんだ。卒業後の一連の彼女の行動が再び僕の心に火をつけようとしていた。

ある日電話が鳴った。彼女から連絡がきた。手紙に記載した連絡先に直接かけてきてくれたのだ。以前かいたように基本的に2人の会話は僕ペースで僕が一方的に話す。僕は高校時代と同じのりではなした。

彼女に何があり、裏でどのような壮絶なドラマが展開されていたかまったく知らなかった。

彼女は最初宝物をあけるような声をしていた。だがそれは最終的にものすごく重いトーンになり、最後は気をとりなおして普通の声になったように記憶がある。ぼくが高校の時とまったく同じのりなのをきいて落胆し

「あいかわらずね」

と言った

今思うと、期待をこめて電話してきたはず。いくら何も知らないといっても、1年ぶりの会話、何か他にやりようがあったと思うが、僕は雑学系の話をして彼女の気を引こうとしていた。もうその時期ではないというのに…コミュニケーションスキルはこの後に及んでも機能しなかった。でも僕なりに心に火がついたことをアピールした。

彼女の気持ちがさめていったのはこの時なのだろうか？ようやく僕の気持ちが復活したとき、彼女の心の火が消えてしまったのだろうか？

ぼくがもっとちがうこと、まさに、あの最後の密会の時、聞こうと思っていた事を聞けばよかった。あれが最後の会話になろうとは…。

ひょっとしたら、彼女は僕の出方しだいでは秘密を告白する気でいたのかもしれない。　こんなセリフを言わすだなんて僕は本当にどうかしてた。

今は会って、この時どう思っていたのか確かめたい。必死にかけてきた電話だったのだろうか？まだ、想いつづけていてくれたのだろうか？

君は最後にこういった

「こんな、話をするとはおもわなかった」

彼女は時おり仮面をつける。

“彼ら”は仮面をつける技能をもつ。特に筋金入りはすごい。この事実に気がついたのはごく最近なのだが、振り返ってみればそれはぼくが小学5年生の時から始まっていた。

小学5年生の“彼ら”からしてみれば僕は格好の練習相手なのだ。自分のつたない技術でも心を容易に操れる僕はうってつけだ。

以前小5のとき、教室で三保松原人体博物館という建物の話を何人かの同級生のまえで披露したときのこと、たった一人だけ、どうしても僕の話を信じないやつがいた。入り口が人の口を模していて、出口が肛門なんだといってもせせら笑う。理詰めがすきな僕はそいつのいう疑問点を1つ1つつぶし、完全に全部つぶした。それでも

信じない。
「どうして？」
と訊くと、また最初に言ったすでに言った疑問点をもちだす。それはさっきいっただろとつぶす。せせら笑うしか手段のなくなったそいつは僕の知らない高度な技能で威圧する。しかし周囲にいたほかの同級生はあきらかに僕の味方で、双方引き分けに終わる。

相手のもっとも不快に思う表情、しゃべり方、しぐさをわざとすることで、相手の心理を萎縮させたうえ、自分の本心もかくせる。それがこの特殊技能の正体だ。
同じ「もしもーし」という発言ももっともカンにさわる言い方を発明し、全員で共有する。
ターゲットは毎日その不快な「もしもーし」を聞かされ萎縮する。というか、それしか聞いたことない人間は彼ら同様のカンにさわる「もしもーし」しか使えなくなり、周囲から一生そのような人物として扱われる。

ぼくは格好の練習相手だったにちがいない。日々感じるストレスから逃げるにはどうすればいいのか？関心をもたなければいのだ。僕の“超”がつくほどの鈍感力も、もともとの素養も加えてこうして磨かれたと考えるのはいきすぎだろうか？

彼女が仮面をはずさない理由、それは監視の存在をうかがわせる。と、いうことは、ぼくが愛くるしいと感じた初対面のときの彼女、1～2年の時の彼女のあの笑顔も大半は仮面だったのかもしれない。そう考えると悲しいが、もう1つ重大な事実に気づく。
つまり僕と会っていた時の、あの密会の最中の愛くるしい笑顔は彼女本来のものであり、“彼ら”ですら間じかにめったに見れないもので、ぼくはそれをずっとずっと見ることができた、今でも脳裏に焼きついている。

僕は知っているのだ。本当に心をひらいたときの人間の表情というものを。彼女に教わった。彼女からもらったあの美しい表情が僕の人格の骨格の重要な構成要素になっている事を彼女に今、つたえたい。

だがもう2度と会えない。

単純に彼女がかわいいだけなら、おそらくここまで好きにはならなかった。

当時も今も僕は待ち続けている、彼女からの手紙を。今もというのはおこがましいかもしれないが、あるうすぼやけた記憶のせいだ。

それは僕が17年間忘れよう忘れようとしていた高校卒業後の記憶のなかにある、確信がもてない記憶の断片。事実か自分でもはっきりない記憶のなかにある心に引っかかるもの。

彼女は僕に手紙を書いたといったような気がする。記憶違いだろうか？そしてぼくは「そんなのもらってない」と答えた記憶がある。なぜそう思うかというと、実際会えたわけだから、手紙の到着の有無などどうでもいいと感じた記憶が残っている、もしかしたら彼女はその他にも手紙を出していたのかもしれない。“彼ら”なら伝票の残らない普通郵便を途中でわざと紛失させるくらいできるかもしれない。彼女は必要以上に自分を抑える遠慮がちな部分を持つ。だから伝票の残る手紙、書留や内容証明郵便などは考え付かなかったのかもしれない。けど、彼女は背中をおされるとどこまでもいけるところまで突き進む性格をしている。ある日突然そうした手段があることに気がついて僕に手紙をくれる日が来るかもしれない…。

普通に考えれば非常識極まりない考えなのだが、彼女の場合はちょっと違う。変わっている。なくはないと思えてしまう。

僕の知る限り、普段彼女は遠慮がちで、おとなしくて、自己主張

などめったにしなくて、謙虚ではにかみ屋なのだが。いざ背中を押されると、行けるとこまでトコトンどこまでも突き進む。何者も省みずリスクを恐れない。そしてふと我にかえり、自分の無鉄砲さに震える。けど、後悔はしない、自分の判断でした事だから決して悔いない。そんな性格をしていた。似ている、2人は似たもの同士だと思う。トコトン突き進む程度の差こそあれ、僕と彼女はその辺似ている。そして他人からわ非常識だと思われる。手紙などいまさら来るはずはないのだが、あえてそれを否定したくないのはこの彼女の性格ゆえなのだ。

最近、彼女との思い出の映画「紅の豚」を見返した。忘れていた記憶がよみがえる。彼女は言った。

「女の子の髪型、私と同じでしょ？」

彼女はヒロインと自分をだぶらせて見ていた。そして豚と僕を重ね合わせて見ていた。

今思い出す、身もだえのする事実。彼女は確かに言った。記憶している、当時の僕はまったく気がつかなかった彼女の発言の真意。それに気づいた今の僕の動揺。なぜ動揺するかというと…、

彼女はあるシーンが一番好きだといった。それはヒロインが豚を守るため、大勢の男たちに対してたった1人で立ち向かい、大演説をし、最終的に男たちを追い返してしまうシーンだ。追い返した後、ヒロインは豚と2人きりになり急に震えだす。恐怖がおくれてやってきたというシーン。彼女はまるで自分のことを描写しているように感じたにちがいない。リアルタイムで彼女は僕を守るだめに奮戦していてくれたのだ、当時。

風のうわさに現在の彼女は失踪したと聞いた。うわさは確認することができず、やるせない思いがつのるばかりだ。僕の妄想は希望的観測として、彼女が僕のために1人で戦っている姿を思い浮かば

せる。
だが、もしうわさどうりなら事実はきっと、早々に力技で連れ戻され、考えを改めさせる。現在の僕がついこないだまで受けていた彼らの猛襲を考えると、彼女はどれほどの目の遭っているのだろうと考えると身のよじれる思いがする。こちらに越してきてから猛襲が控えめになった。彼女は東京にいるのだろうか…。

僕はもう待つより手段がない。
17年前、ある分岐点があった。

高校生の彼女のメガネ姿なんか1度もかけた姿見たことなかった。なのに当時、彼女はメガネを持っていた。いつだったか忘れたが彼女の胸のポケットに黒ぶちのダサいメガネが入っていたのに気がついた。2人並んで座っていて、ぼくが彼女に触れたときたまたまいつも持っていないそれに気がついたのだ。

「目わるいの？」と訊くと、悪くないと答える。
じゃあなぜかけてるの？と訊くと
「これかけて髪型かえて自転車のると私だってわからないでしょ？」という。
もちろん尾行対策なのだが、今考えるとどれほどの効果があったのか疑わしい。
「かけて見せて」というと猛烈にいやがる。理由をたずねると
「似合わないから…」という。
尾行のことなど露ほどにも思わない僕はなぜ似合わないめがねをかけるのか面白がって詰問した。困った彼女は実際それをかけて見せた。ホントに似合ってなかった。このままでは話がさらに彼女の都合の悪い方向に進みそうだと思った彼女は機転をきかせて
「あなたがかけてみて」とそのメガネを僕に渡した。
かけて彼女に見せると

「ふふ、似合ってない」と微笑んだ。その笑顔がかわいくて、それ以上追求しなかった。

いま思えばあれは重大な分岐点だったと思う。あのまま彼女を追及し続けていたら、なにか変わっていたかもしれない。ぼくが自発的に彼女の闇を追及したのは当時この時だけだったと思う。僕も遠慮がちで、控えめで、自己主張などあまりしない人間だった。

もう今の僕に彼女を追及する手段はない、ごく最近彼女の実家に連絡をいれた際も、あろうことか彼女のニセモノが電話にでてきた。僕もバカじゃない、性格の違いや声の違いくらいわかる。それに妙に親しげでよそよそしい。いくつか質問をした、本人にしかわからないようなことを　全質問のなかに1つだけウソの事実をいれた、見事ひっかかった、本人じゃない。当時彼女を監視していた“彼ら”の1人なのだろうか？妙に詳しかった。

これ以上の自発的行動はできない僕は、もう待つしか手段がない。一縷の望みに期待をたくして…。手紙を待とうと思う。書留か内容証明郵便、郵パック、宅配便、伝票の残る形での手紙の出し方はいくらでもある。表の世界のルールを破れない以上“彼ら”とて届けざる得ないと思う、ちゃんと着いたか伝票さえあれば追求できる。

住所は昔と変わってない、電話もそうだ。僕の場合、古い彼女の住所から現在の実家を見つけ出すまで1日かかった、電話帳とお父さんの名前、あとはＰＣがあれば十分だ。本気で探せばできるはずだ。

一般的に考えてこれらは荒唐無稽なフィクションに思われる。

けど僕は１７年まえにもらった彼女からの手紙がそれを覆す。それは夏祭りの大告白ののち、僕の態度の対する彼女の思いを綴った内容の手紙だ。僕はこの手紙だけどうしても処分できなかった。何

度読んでも意味がわからないのだが、彼女の言い表せない思いがひしひしと伝わってくるからだ。彼女は遠慮がちな表現を使いながら、僕を怒らせないよう気遣いながら僕を非難した。しかし肝心なことが抜け落ちている。感覚だけで書かれたそれは胸をうち、涙をさそうのだが意味がわからない…。

１７年たち、事実に気づいたいま、手紙のなぞは解凍され、すべてが理解できるようになった。そして、この手紙の物理的存在がこれら僕の考えが必ずしも妄想でないことを保障してくれている。ほんとにごめん理解してあげられなくて。君の価値に気づけなかった。

今でも外にでると彼らに遭遇する。随分観察した結果、ある事実に気がついた。

なぜ、彼女が最初のデートでマックに入ったとき、オレンジジュースしかたのまなかったのかの理由がわかったのだ。

彼らのテクニックの肝は常に対象とする人間のパーソナルスペースを侵害し続けることで、連続的緊張をしいて精神不安や体調不良を誘発することにある。常にしかめっ面、必要以上な接近、わざと自らの食事姿を見せたり、感じのわるいタバコの吸い方、感じの悪い腕の上げ方、感じの悪い接客…、１つ１つはたいしたことないが何十人何百人が連続して行うとかなり効果がある。

１７年前、ポケベルで呼び出された彼女はこうしたことをさせられていたのだろうか？そういえば「女の子がタバコなんて感じわるいでしょ？」とか雑談のなかで言っていた。初めてのデートで食事をしなかったのは、精一杯の好意の現れだったのかもしれない。

東京にいたとき、この彼らの猛襲に遭遇し、最初その正体に気がつかなかったぼくは、精神的に追い詰められ、最後の２日間は本当にぎりぎりの所まで追い詰められた。必死でネットを探り、彼らの名を知った、書いてある情報を見た瞬間、１７年前のあの謎の思い出が次々と蘇ってきて、すべてを悟った。もし、あの記憶がなかっ

たらその後僕は電車の中でナイフを振りかざしていたかもしれない。彼女に再び救われたことになる。１７年前僕を守ってくれたように…。彼女がぼくにとって特別な存在であるのがおわかりいただけるだろうか？

１度リストにのった人間はおそらく一生ターゲットにされ続けるのだろう…、ＴＶでみる有名人の謎の変死もギクリと感じる時がある。あるラジオパーソナリティーなど、彼らと遭遇しているとしか思えない話を毎回している。２０世紀少年の漫画版が売れた理由が以前はわからなかったが、今はよくわかる。“彼ら”のなかの彼女のように疑問を感じている人達にしてみればあの物語は切実に感じるのだろう。

僕はいずれ“彼ら”に刈られるだろう…。どこまでがんばれるか。

君は僕がこんな事を言ったらどう思うだろう、

推察するに君はかなり高い地位の旦那に嫁いだものと思われる。でなければ“彼ら”の熱気とヘリまで飛んでくる理由は説明できない、信頼する人まで彼ら側にまわってしまった…。

こんなこと書いてごめん…

君の力で僕をリストからはずしてもらう事はできないだろうか？

“彼ら”と遭遇するたびに君の事を思い出す。これで忘れろというのは無理な相談だ。

君が望むなら手持ちの宝物を処分もするし、一生口をつぐみもする。他の人間にいわれても絶対しないが、君に言われたらそれは絶対だ。なぜなら、ぼくの立ち位置は君の望むべき世界が実現するのを祈るというものだからだ。君がそれを望むなら受け入れる。

もし奇跡がおきて再会できても、ぼくは“彼ら”によって誘拐犯にでもされてしまうだろう…。
もし君が想像以上に僕を思っていてくれて離婚を考えたとしても、実家の協力が得られなければ弁護士費用も工面できないはずだ。僕には地位も財産もないし、そもそも僕が関われば不貞罪が成立してしまう。
別居が長期間に及べばそれも容易ときくけど、身内に対しては容赦ない彼らがそれを許すとは到底思えない。本で読んだ、考えを改めさせたくて奥さんを寺に軟禁して毎日修行させた話を…。

敵の敵は味方という、わかるだろうか？彼ら最大の目の上のたんこぶ。かつてたもとを分かち合っていたもうひとつの“彼ら”。
もしくは、外国に起源をもつ似て非なる“それ”しかし慎重に完璧に準備しないと。通常とはちがう手段。人とちがう発想のできる君なら思いつくはずだ。

それに、僕の希望に反して今の暮らしに満足していて、僕の事などどーでもいいと思っているのかもしれない、それならそれでいい、あとは“彼ら”に刈られるのを待つだけだ。

もし、少しでもなにか思う事があったら、助けてほしい。心をもらった上、人生までほしいと言うようで、自分でもずうずうしいと思う。けど、君の知る僕は君の想いもしらずぬけぬけとこういう事を言う人間だったと思う。もし、この人はこれでいいのよと思ってくれていたら。ぜひご尽力を。自分でも愚鈍で軽薄なお願いだと思う、これも君を忘れるためには必要なことだと思う。
今も外で大型トラックのアイドリングが聞こえる、極低周波で不快感をさそうつもりだと思う。これに対抗する手段はいくつかある

がここには書かない。今日、日吉神社に行ったら工事で通行止めになっていた。ネットに書いて数日でこの調子だ。君の実家を訪ねたこともつい最近あったのだが、その時も通行止めが3箇所もあった。“彼ら”はあまくない、同情や情けの通じる相手ではない。

昔、小学生の時。学校の近くの文具店のおばさんの悪いうわさがひろがった。しかし、そのおばさん自体は悪い人ではなく、当時不思議に思った。ちなみに現在その店はない。

今、ぼくも小学生の間でなにかしらうわさされてるらしい、うわさが“彼ら”以外の一般の人にも広がればやっかいな事になる。その手の冤罪にはめられてしまいかねない。

火事にも気をつけなければならない、形に残らない形で警告をうけている。

東京にいた時は正直“彼ら”と刺し違える気でいた。君のためならそれもできると思った。しかし運命は途中で狂い、僕自身のあまい見通しによる判断ミスから、現状のようになってしまった。僕に新しい人生を歩む資格があるのだろうか？もし君が読んでいてくれるのなら、教えてほしい。

こんな事を書いていたらまた1つ思い出した。
あれは君がもう部活をやめるつもりだと言っていた時の事、それを聞いた僕は「やめたいやつは辞めればいい」と宣言した。人づてにそれを聴いた君は部活に残ることにした、そんなこともあった。しばらくして君は僕がそんなこと言ってたと聞いたと言った、僕はとぼけた。現にとなりに君がいるのだから言う必要がなかった。

今のぼくはどこへ進めばいいのかまよっている、君はぼくの一部となってしまった…、否定は自殺を意味する。君にことわりなくそんなことはできない。人は話せばつうじあえる、僕はこれを信念にしてる、通じないのは、ボクに表現力が足りないからだ。高嶺の花と思っていた君に気持ちが通じた事実が僕にこの信念を持たせた。君を否定することは信念の否定だ。この先おそらく気持ちの通じ合える人には出会えないかもしれない、君と関わったばかりに会う人会う人“彼ら”がほとんどだ。でも後悔はない、君の本当の価値に気づいた今、ここにお現状は僕の誇りでもある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0670i/

もう一度あいたい君へver1.5

2010年12月9日03時05分発行